

### 研究と教育の両面で使い倒す

松尾 昌樹

#### ●統計、センサス資料を求めて

私は近年ではセンサスや統計資料を用いて中東諸国の政治経済を分析している。この分析のために古い時代のセンサス資料を購入しようとしても、現地の統計局が古い資料を保存していないことがよくある。このため、最新版ではなく、二、三〇年前のセンサス（つまりは二、三回前のセンサス）を調査し、さらに複数の国で比較しようとするなら、中東地域に関しては、現地を訪問するよりもアジ研図書館に行く方が便利だ。ただし、センサスや統計資料に収録されている情報は、資料の各号で項目が異なることがあり、実際に目を通してみないと研究に使えるものかどうか分からない。また、電子化される以前の時代の資料を利用する場合、調査項目で検索をかけることができず、大量の項目に一つ一つ目を通さなければならない。このため、アジ研図書館に足繁く通うことになるが、三階の各国別統計資料の書架と机の間を行ったり来たりしながらデータを収集していると、調査国の社会・経済が生き生きと立ち現れてくるため、いつまで続けても飽きない。

当然のことながら、アジ研図書館には統計資料以外にも、多種多様な専門書や新聞、雑誌が所蔵されているため、それこそ一日中、情報収集を続けることが可能だ。アジ研図書館は基本的に開架式図書館なので、目的の資料を探して

書架の間を歩くことは、まるで情報の森を散策するかのようで、時に全く予想していなかった資料に出会うこともあり、楽しい。如何にすばやく目的の情報にたどり着くか―この効率是非常に重要だが、しかし一方で、情報の森をあてもなく散策するという非効率な行為が、新たな発見に繋がることは多い。その蔵書資料の多様さだけではなく、高度に専門的な情報が、開架書架によって読者に開かれていく空間、それがアジ研図書館の最大の魅力である。

#### ●学生を連れて利用

ただし、こうした非効率な情報収集の魅力は、それをやったことのない人には、なかなか伝わらない。特に卒論作成前の、文献調査それ自体にあまりなじみがない大学生にはなおさらだ。このため、私はゼミ生を連れてアジ研図書館の見学を行う際には、彼らがそれらの一つ一つに手を触れる経験を重視している。学生達はレポートや卒論の作成を行う場合、「資料がない」という言葉をしばしば口にしているが、アジ研図書館に来れば、少なくとも現代アジア・途上国に関する情報は豊富に存在している。資料の豊富さを実際に目で確認した学生等は、「資料がない」という言葉を口にしなくなる。もちろん、アジ研図書館が全ての情報を揃えているわけではないのだが、あまりにも多様な書籍、新

聞、統計、雑誌資料を目にすることで、学生達は自分達の求める情報が「どこかにあるはずだ」という確信を持つようになる。また、目的とする情報を入手するという当初の目的だけではなく、膨大な資料に圧倒されながらも、広大な資料の森を散策し、新たな発見をすることそれ自体の楽しさを、徐々に獲得するようになってゆく。

私が学生を連れて見学するときにもお願いするのは、地図の保管室の見学だ。前記の通り、アジ研図書館は開架図書館だが、地図とマイクロフィルム等の一部の資料は別室に保管されており、利用者はこれらの保管室に入ることができない。図書館見学の時は特別にお願いして、地図の保管室をみせて貰っているが、脱酸素パウチ加工された地図が整然と（場合によっては整理中の地図が雑然と）置かれた様を眺めると、資料がいかに収集され、整理されているのか、その一端を垣間見ることができると、必要とする情報に辿り着いた時に感じる、その情報を作成した人間が存在する（した）ことへの驚きと感動、そうした人々の末席に自分の名を連ねる喜びが、研究活動の原動力だと思ふ。図書館という巨大な知識の森が、人間の手で常に整備され続けている様子を眺めることは、英知を生み出し、保存し、伝えるという人間の営みを理解する上で非常に重要なことだ。アジ研図書館の見学を通じて、学生にこういった営みのすばらしさを感じて欲しいと思っている。

（まつお まさき／宇都宮大学国際学部准教授）